

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY

アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第16回秋季研究集会 予稿集

2023 年 10 月 28 日（土）

東京文化財研究所及びオンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 第16回秋季研究集会プログラム／目次

●2023年10月28日(土) 13:00 - 16:30

13:00- 開会挨拶 本間 友(アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)

【萌芽研究発表】 13:10 -13:50 (発表10分 コメント5分 質疑5分)

13:10-13:30 [発表1] 鳥塚 英玲奈 p.4
書誌情報運用管理システム構築の検討

13:30-13:50 [発表2] 鈴木 萌夏(東京藝術大学大学院) p.5
画廊史研究における資料整理の実践
—レントゲン藝術研究所の一次資料を元に—

【一般研究発表】 14:00 -16:10 (発表25分 質疑5分)

14:00-14:30 [発表1] 阿児 雄之(東京国立博物館) p.6
『令和4年度教育における広域なデジタルコンテンツの
利活用環境の整備に向けた調査研究報告書』の分析

14:30-15:00 [発表2] 小山田 智寛(東京文化財研究所) p.8
「売立目録デジタルアーカイブ」の活用とシステムの改修について

15:10-15:40 [発表3] 宮前 知佐子(国立民族学博物館) p.10
海外事例から見る文化資源のデジタルプラットフォームの現状と展望
—データ公開が進むノルウェーの事例を中心に—

15:40-16:10 [発表4] 橋本 久美子 p.12
戦没学生の楽譜の保存・継承における課題 —鬼頭恭一を中心に—

16:10-16:30 閉会挨拶 田良島 哲(アート・ドキュメンテーション学会 会長)

アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内 p.14

発表者プロフィール

<萌芽研究発表>

鳥塚 英玲奈（とりづか えれな）

団体職員

多摩美術大学芸術学科卒業。組織の文化資産や、中欧地域を主としたデザイン分野におけるアーカイブスとキュレーションに関心を持ち、ライフワークとして調査を進めている。

鈴木 萌夏（すずき もえか）

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程

2019 年、女子美術大学芸術学部アートプロデュース表現領域専攻卒業。2021 年、同大学大学院博士前期課程修了。2017 年より研究プロジェクト「レントゲン藝術研究所の研究」として展覧会やインタビュー、ZINE の発行などを行なう。主な展覧会企画に「遺伝的美意識」（日本橋三越コンテンポラリーギャラリー、2023）など。

<一般研究発表>

阿児 雄之（あこ たかゆき）

東京国立博物館 情報管理室長

／文化財活用センター デジタル資源担当室長

東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻修了。博士（学術）。東京工業大学博物館特任講師などを経て、2018 年から現職。専門は文化財科学、博物館情報学。分担執筆著書に、「東京国立博物館における情報連携事例から見るミュージアム情報の流通」『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』（樹村房、2023）、「デジタルアーカイブ活用の技術—美術館・博物館の例」『入門デジタルアーカイブ』（古今書院、2017）他。

小山田 智寛（おやまだ ともひろ）

東京文化財研究所 文化財情報資料部・主任研究員

2014 年、日本大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学。東京文化財研究所研究補佐員、研究員を経て、2022 年から現職。在学中より東京文化財研究所のウェブ公開データベースの開発を行う。これまでに公開された主なデータベースは、「ガラス乾板データベース」、「物故者記事データベース」、「黒田清輝日記データベース」、「明治大正期書画家番付データベース」、「売立目録デジタルアーカイブ」、「斎藤たま 民俗調査カード集成」等。

宮前 知佐子（みやまえ ちさこ）

国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 助教

2007 年東京工業大学大学院理工学研究科（計算工学専攻）修士課程を修了。同年、凸版印刷株式会社入社。文化資源のデジタルドキュメンテーション手法ならびにドキュメンテーションデータの利活用手法の開発・研究に従事。2019 年東京工業大学大学院社会理工学研究科（人間行動システム専攻）博士後期課程修了。博士（工学）。東京工業大学博物館研究員を経て、2022 年より現職。三次元計測など情報技術を応用した文化資源のドキュメンテーションや展示手法、サイエンスコミュニケーションに関心を持つ。

橋本 久美子（はしもと くみこ）

東京藝術大学音楽学部楽理科、同大学院修士課程音楽学専攻を経て、同大学百年史のうち音楽篇 6 巻の編集に従事。刊行後の 2005 年頃より東京音楽学校（藝大音楽学部の前身）の再調査とともに、学徒出陣に関する学内外の記録の体系的調査を初めて行なう。2017 年より戦没学生の楽譜を演奏しアーカイブズとして構築する「戦没学生のメッセージ」のプロジェクトに関わる。2022 年 3 月まで東京藝術大学音楽学部大学史料室非常勤講師、現在は協力者。学習院大学非常勤講師。共著書に『ピアニスト小倉未子と東京音楽学校』（東京藝術大学出版会、2011）。大学史に関連する人物や音楽を中心に研究を行なう。認証アーキビスト。日本アーカイブズ学会登録アーキビスト。

書誌情報運用管理システム構築の検討

Consideration of building a bibliographic information management system

鳥塚 英玲奈*

TORIZUKA, Erena

Resume:

本論は、オープンサイエンスの潮流において、自然科学領域における書誌情報の管理や運用について、考察した内容をまとめるものである。著者は、ある研究チームにおいて成果論文の書誌情報を管理する業務を専任で担当している。一般に公開されている既存のサービスを利用し、限定的な環境で試験に運用を開始し、約3か月が経過した後の状況分析と、今後の展望について述べる。

1. 研究チームの書誌情報管理

1.1 事例の分析

まず前提として、考察の対象は限られた範囲で試験的に実施しているものである。また、ここで書誌情報として取り扱う成果は、論文形式とする。研究チームに所属する研究者の発表した論文を、分類はするが情報として順位付け等を行うことなく同一に扱うものとする。

1) 整備前の状況

研究チームとしての活動であっても、資料や論文成果は、研究者個人に委ねられ、チームの共有資産としての保存や管理は成されていなかった。そのため、外部への報告などを目的として項目ごとの分類やリスト化する必要が生じた際に、事象発生ベースで都度、対応することになり、履歴が残らず、情報が資産として可視化されていないことが課題であると感じられた。

2) 整備方法の検討

数多くの書誌情報の管理サービスのなかで、直感的な操作が可能で、導入の負担が少ないという点から、George Mason University(ジョージ・メイソン大学)の開発したソフトウェア Zotero(ゾテロ)を選択した¹。Zoteroは、書誌データおよび関連する研究資料を管理するための無料のオープンソース参考文献管理ソフトウェアである。PDFをアップロードすることによりメタデータを抽出して書誌情報を登録することができ、手入力した書誌情報に茅づる式にパワーポイントフ

ァイルやメモ書きの付与が可能である。特に利便性が高いと思われるのは、タグの機能である。タグ項目に、キーワードとなる用語を保存しておく、保存された用語が、画面の隅にまとまって表示される。タグを選択すると、その用語がタグ付けされた書誌情報のみが表示され、必要なリストを作成することができる。

3) 改善点など

Zoteroでの書誌情報運用管理について、データの利活用という点で考えると、機能面では、直感的な操作ができる一方で、自動的に意図しない情報が振り分けられ保存されるといった難点がある。運用面では、年間を通して一連の業務を見通さなければ決定できない箇所もあるため、現状は未だ事象発生ベースの対応に留まる。

2. 今後の展望とまとめ

書誌情報のデータベースを、事務職にとっては目録として、研究職にとっては過去の論文情報の引用元として、積極的に活用できるよう促したい。そのために、情報量の充実や、登録された情報の正確性の担保が、課題になる。

本発表は、個人の考察であり、所属機関とは一切関係がない。日頃、著者をサポートする家族や友人にお礼を述べたい。

¹ Zotero, <https://www.zotero.org>. (Accessed 2023-10-13)

画廊史研究における資料整理の実践 —レントゲン藝術研究所の一次資料を元に—

The practice of organizing materials for research on the history of art galleries: Based on the original Materials of the Roentgen Kunstinstitut

鈴木萌夏*

SUZUKI, Moeka

Resume:

1991年から1995年まで存在していた画廊「レントゲン藝術研究所」についての調査を行う過程で、一次資料を当時の画廊主より引き受けた。筆者の手元に届いた段階では段ボール10箱にファイルと封筒が入っており、その時々所有者によって何度か整理を試みられた形跡はあるものの、全体を通してまとめられ、検証されることはなかったようである。そのため、フォンドと種類ごとのリストを作成することを目的として整理作業を行った。本発表では、その整理作業とそこから見えた課題について、資料の状態、整理方法、分類方法、課題の順で報告する。

1. 資料の状態

本資料は、元々レントゲン藝術研究所が所有していたもので、2018年11月時点では多摩美術大学芸術人類学研究所に保管されていたが、本研究を実施するにあたり、画廊主によって筆者に寄託された。筆者の手元に届いた段階では、資料は段ボール10箱にまとめられ、ファイルと封筒が入っていた。その時々所有者によって何度か整理を試みられた形跡はあるものの、全体を通してまとめられ、検証されることはなかったようである。整理作業は、アシスタント2名と約30日かけて行った。

2. 整理の方法、分類方法

資料は情報を検索した際にスムーズに該当の資料に辿り着けるようにすることを目標とした。そこで、フォンド(資料群の総体)とシリーズ・リスト(種類ごとのまとまり)を作成するところまでをひとつの区切りとした。手元に届いた際の資料は段ボールに入っており、所々に劣化や破損が見られたので、資料を保管するにあたり、酸化や劣化の可能性を鑑みて、コンテナに移し、整理作業を行った。その整理作業について報告するものである。

3. 課題、今後の展開

今回の資料整理によって資料総数は約10,900点で、そのうち書簡が約780点、文書が約2,700

点、クリッピングが約430点、写真が約6,120点、VHSが98点、イベント印刷物が749点だったことがわかった。さらに榎木野衣著『美術になにが起きたか—1992-2006』の「レントゲン藝術研究所展覧会一覧」には記載されていない展覧会やイベントがいくつか存在しており、単発的な企画やイベント、ディレクターのコレクション展なども開催されていたことがわかった。これらは資料の一部にチラシや案内状などが保管されており、今回の資料整理を行ったことで発見することができた。また、個人的なイベントも開催されていたため、それらをどのように位置付けて分類していくかが今後の課題である。劣化が懸念される資料に関しては、その取り扱いに専門的な知識が必要であり、加えて早急な対応が求められる。さらに個々の資料について公開するには権利関係などの諸問題を解決しなければならない。しかし、資料の中には公開できる情報も多く、今後も引き続きシリーズごとのリストを作成し、最終的には資料目録の公開と藝術研究所の活動についてまとめたいと思っている。

4. 謝辞

アシスタントとして整理作業に尽力してくれた多摩美術大学の中島七海さんと中村陽道さんに深謝の意を表す。また、資料整理の一部は小笠原敏晶記念財団の調査・研究等への助成(現代美術分野)によるものである。

*すずき もえか (東京藝術大学大学院先端芸術表現科博士後期課程)

『令和4年度教育における広域なデジタルコンテンツの利活用環境の整備に向けた調査研究報告書』の分析

Analysis of "Research Report for the Development of a Wide-Area Digital Contents Utilization Environment for Education in 2022"

阿児 雄之*

AKO, Takayuki

Resume:

デジタル庁、文部科学省、経済産業省が実施した『令和4年度教育における広域なデジタルコンテンツの利活用環境の整備に向けた調査研究』について、公開されている成果報告に基づき分析・批評する。当事業では、教育現場での児童・生徒や教職員による教育デジタルコンテンツの利活用促進を目的として、次の取り組みをおこなっている。1. 学習指導要領コードと教育デジタルコンテンツの紐づけ、2. AIによるメタデータ付与プロトタイプの開発と実証、3. 検索APIの開発と実証。これまで、コードとコンテンツの紐づけや検索APIの開発については研究報告があるが、国立国会図書館サーチやジャパンサーチなどを対象とした大規模かつ包括的な取り組みは初めてである。これら成果ならびに導かれた課題は、教育コンテンツを有するミュージアムにとって近い将来検討を求められるものであろう。そのため、現時点で分析・批評をおこない、広く議論が発展する素地を整える。

1. はじめに

GIGA スクール構想における取り組みの中には、生徒1人1台端末といったICT環境の整備に加え、デジタル教科書をはじめとするデジタルコンテンツの活用促進が掲げられている。ICT環境整備については、オンラインでの授業や学習の必要性が高まり、当初計画より前倒しでの環境整備がおこなわれてきた。一方、教育や学習に資するデジタルコンテンツの利用促進については、未だ取り組みねばならない課題が多く残されている。

このような状況下において、デジタル庁・文部科学省・経済産業省は『令和4年度教育における広域なデジタルコンテンツの利活用環境の整備に向けた調査研究』¹を実施した。当事業では、国立国会図書館サーチやジャパンサーチなどを調査対象としており、その成果は、博物館・美術館等にも大きく関連するものである。本報告では、公開されている調査研究成果を分析・批評し、これからの教育におけるデジタルコンテンツ利活用について議論する素地を整える。

2. 調査研究の成果の分析

2.1 調査研究の概要

前述のとおり、当事業は、デジタル庁らによる

ものであり、その実施事業者には、富士ソフトが採択された²。事業成果は、デジタル庁のウェブサイトにて公開されており、報告書に加えて、各種成果データやシステム設計書もあり、本報告のように第三者による分析や活用がおこない易い状態にある。過去の調査研究事業では、報告書すら公開されないものもある中、デジタル庁の発足による変革が現れている。

当事業の目的は、「教育デジタルコンテンツとして利用可能な官民のデジタル書籍・素材などについて学習指導要領コードとの紐づけを行い、メタデータとして利用するための間口の拡張を目的として検索APIのプロトタイプおよび、新しく参画されるコンテンツホルダーに対する学習指導要領コードの自動紐づけを行うためのAIプロトタイプを作成し、公開することで教育デジタルコンテンツの利活用促進を可能とすること」とされ、大きく3つの取り組みから構成されている。

2.2 学習指導要領コードと教育デジタルコンテンツの紐付け

当事業では、紐付けをおこなう教育デジタルコンテンツを、書籍・画像・動画としている。ここでは、特に博物館・美術館と関係性の高いデジタル画像への紐付け成果について分析する。具体的

*あこ たかゆき（東京国立博物館）

に紐付け対象としている画像は、ジャパンサーチ・STEAM Library・東京国立博物館画像検索に収録されているもので、各教科1万点以上の調査をおこなっている。紐付けの手順は、まず教科書編修趣意書を用いて、各ウェブサイトでの検索キーワードを整備し、それらを用いて関連するコンテンツを検索・判定し、紐づけるというものである。

紐付け結果を見ると、普通校の教科において、11,437 キーワードに対して3,206の画像が紐づいているが、それらは社会科(2,111件)に偏ってしまっている。この結果は、美術館ならびに自然科学系や科学技術系博物館のコンテンツが対象になっていないことが原因であろう。しかし、一方で幅広い分野・領域にわたるコンテンツが収録されているジャパンサーチであっても、幅広い教科に紐づけられる訳ではない。その一因としては、ジャパンサーチでの紐付け対象が各コンテンツではなく、歴史上の出来事や人物を取り上げたものが多いギャラリーを対象としたことが考えられる。また、紐付け結果には、明らかな間違いが多く含まれてしまっている。例えば、「風土記」というキーワードに対して、「新風土記」に収録された画像が使用されているジャパンサーチのギャラリーが紐づいている。ギャラリーの内容を確認していない結果であり、紐付け成果の評価には改めての内容確認が必要である。

2.3 AIによるメタデータ付与プロトタイプの開発と実証

この取り組みにおいても、デジタル画像についてのみ述べる。AIによるメタデータ付与は、画像自身の特徴量抽出をおこなうようなことはせず、画像が掲載されているウェブページから概要文やタグからテキストサマリー情報を抽出し、これを形態素解析して数値化(ベクトル化)することによって、学習指導要領内容との類似度を算出し、紐づける手法をとっている。この手法では、ウェブページ掲載のテキスト情報の質と量が結果に影響する。そのため、作品解説文の掲載が少ない

コンテンツ掲載サイトでは十分な内容抽出ができないという問題が発生している。

2.4 検索APIの開発と実証

実装された検索APIは、学習プラットフォーム事業者や教育関係者による実証実験もおこなわれている。事業者からは、検索が可能になってもコンテンツの要旨や利用条件が含まれていないことにより、実際の利用へと繋がらないとの声があがっている。また、教育関係者からは学習指導要領だけではなく、デジタル教科書や指導書からコンテンツを検索できることが望ましいとの意見がある。実証実験で用いられたコンテンツは、限られたものであったため、実際の運用を想定した場合での課題が多く挙げられているが、今後のサービス設計やユースケース想定に対しての課題整理がなされていると考える。

3. 博物館・美術館視点からの分析

当事業は、今まさに学校教育現場で求められている、多様な学習デジタルコンテンツ活用に呼応したものである。これは、教育関係者のみならず、学習デジタルコンテンツを保有する博物館・美術館にとっても無視できないものであるが、その成果を見る限り不十分なものである印象を拭えない。短期間での実施であったことも影響していると思われるが、対象としたデジタルコンテンツも広範なものではなく、分野にも偏りがある。そして、取り組み手法と対象デジタルコンテンツの相性も適切でないとされたものが多々あった。しかし、抽出された課題は、今後の研究ならびに事業へ有意義なものである。博物館・美術館においては、所蔵品情報の整備公開や利用条件の明確な提示などが課題とされている。現在も各機関が尽力している事業であると思われるが、教育への利用には更なる情報充実が求められている。

なお、本発表は科研費23H03695 基盤(B)「学校教育とデジタル・アーカイブを結ぶ学習内容情報LODを用いた架橋モデルの設計」による研究成果の一部である。

¹ デジタル庁, <https://www.digital.go.jp/policies/education>, (Accessed 2023-09-22) .

² 富士ソフト, <https://www.fsi.co.jp/company/news/20230428.html>, (Accessed 2023-09-22) .

「売立目録デジタルアーカイブ」の活用とシステムの改修について

Utilization and System Update of "The Auction Catalogue Digital Archive"

小山田 智寛*

OYAMADA, Tomohiro

Resume:

東京文化財研究所では所蔵資料の保存と活用の両立を目指し、所有する売立目録のデジタル化と掲載内容のテキストデータの作成を行った。平成 27 (2015) 年に作業を開始し、令和元 (2019) 年には「売立目録デジタルアーカイブ」として公開することができた。これにより当初の目的を達成することはできたが、新たにデジタルデータやシステムの保存と維持の責を負うこととなった。これについては、活発な利用の持続こそが、デジタルデータやシステムの維持につながると考え、さらなる活用を促進するためにシステムの改修を継続している。

1. 売立目録について

売立目録とは、個人や名家が所蔵する美術品や工芸品を売却する売立会（入札会）で配布するために作成された目録である。明治、大正、昭和を通して、およそ 4,000～5,000 件が全国で作成されたとされる。これらの売立目録には、作品名や作者等の他、写真が掲載される場合もあり、美術品等の来歴を今に知らせる貴重な資料の一つとなっている¹。

2. 売立目録から何が分かるのか

厳密に言えば、「ある日、ある場所で、A と称される作品が売立会に出品された」という事実である。模写や模造等の可能性がある以上、この A を例えば現存する B と同定するためには、これまでの調査・研究との照合が不可欠である。A を別の売立目録に掲載された C と同定する際も事情は同じである。売立目録自体を疑う必要はないと考えるが、掲載情報を取り扱う際は、売立目録が、売立会の参加者という、ある種の共通理解を持った限定的なコミュニティに対する配布物であったという性質に注意しなければならない²。

3. デジタル化と公開

東京文化財研究所（以下、当研究所）では、昭和 5 (1930) 年の開所にあたり、売立目録の収集を方針として掲げ、現在約 2,500 件を所蔵している。なおコピーができなかった時代には、同じ売立目録を 3 部入手し、その内の 2 部から図版を

切り抜いた作品カードの作成等を行っていた。

これらの売立目録の劣化を防ぎ、活用し続けるためには悉皆的なデジタル化が必要だった。そこで、古くから東京での売立会を開催し、所蔵する売立目録の保存と活用に同じ課題を抱えていた東京美術倶楽部の協力を得て、平成 27 (2015) 年より第二次世界大戦終結以前の売立目録を対象として、両機関が所蔵する売立目録から 2,621 件を選んでデジタル化する作業を行い、図版が掲載された約 37 万件の作品については作品情報のテキストデータを作成した。データの作成にあたっては、原本の表記を尊重したが、記載された作者名に対する一般的な辞典の記載名による補記や、「伊万里」、「今利」等の表記ゆれに「イマリ」を補う等を行った。

これらの画像データと作品情報は令和元 (2019) 年、「売立目録デジタルアーカイブ」（以下、本アーカイブ）として、当研究所閲覧室の専用端末にて公開された（要予約）³。また、令和 3 (2021) 年より当研究所所蔵の売立目録に掲載された約 34 万件の作品情報についてはインターネット公開を行った⁴。

4. 「売立目録デジタルアーカイブ」システムの開発と改修

本アーカイブのデータ登録システムは、書誌情報と作品情報の 2 テーブル、37 項目のデータベースとして構築されたが、データの蓄積に伴い項目は倍増した。さらに、当初、画像ファイルは作

*おやまだ ともひろ（東京文化財研究所）

品情報の一部として登録していたが、表紙等の作品の掲載されない画像も管理するために、画像情報のテーブルを新規に追加し、作品情報との関連付けのための中間テーブルも追加した。これは画像のファイルサーバにアクセスできる作業関係者には必須の改修ではなかったが、一般の利用者のためには不可欠な改修だった。

インターフェースについても改修を行った。当初は管理者用画面と作業用画面が完全に独立した堅牢な設計だった。しかしデータの作成と入力規則の見直し、システムの改修が並行して行われたが、堅牢性による改修の遅れは作業の妨げとなった。また管理画面を利用できない作業者にとって全体の把握は難しく、その結果、作業画面上では破綻していないものの全体としては形式の合わないデータが入力されることもあった。

目的外の項目の利用や入力形式の逸脱は、作業者によるシステムや画面の使いこなしの工夫とも考えられる。しかしながら、特定の画面に依存する工夫で作成されたデータの汎用性は低く、システム全体へ悪影響を及ぼすこともある。そこで、作業者もシステム設定やテーブル構造等の把握が可能で、全データのエクスポートも自由に行えるようシステムの再構築を行った。

5. 今後の活用と改修

現在は、本アーカイブ作成後に新規に収集した売立目録の管理等のため、書誌情報に含めて登録していた所蔵情報の独立を検討している。

作業開始当初より、他の所蔵機関との協力による、完全版「売立目録デジタルアーカイブ」も当研究所内で構想されていた。本アーカイブに対し

て、いわば当研究所が客観的な立場をとるための改修である所蔵情報の独立が、この構想の第一歩となるよう検討を続けたい。

売立目録がある種の限定的なコミュニティへの配布物であったように、本アーカイブのシステムも当初は作業関係者のみを利用者とみなし、ファイルサーバへのアクセス権や暗黙の了解を前提として開発された。このような利用者の限定が効率的なシステム開発に寄与するところは大きい。しかし成果を公開し、活用をすすめる段階においては利用者を限定しないことが求められる。さらに想定される利用者とは必ずしも人間だけではないだろう。今後は、様々なシステムやプログラムでも容易に利用し、解析できるようなデータを出力するためのシステムであり、データ構造であることも必要であると考えている。

6. 終わりに

本アーカイブは所蔵資料の保存と活用の両立を目指して構築され、この目標はある程度は達成された。しかし、本アーカイブの構築により、デジタルデータやシステムの保存と維持についての責を新たに負うことにもなった。デジタルに関連する様々な技術は、いまだに過渡期であり、長期間にわたって有効な手段を見出すことは難しい。しかし、当該のデータやシステムが活発に利用されることが、障害の早期発見につながることは事実である。データやシステムの保存や維持は、その常時利用の結果として達成されるものと考え、様々な観点からの活用に対応できるよう改修を継続したい。

¹ 売立目録および当研究所の売立目録の収集については、安永拓世「売立目録デジタルアーカイブの概要」、『売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望：売立目録の新たな活用を目指して』東京文化財研究所、2021年、pp.7-15.を参照。

<https://doi.org/10.18953/00009070>, (Accessed 2023-09-27)

² 大規模な売立会の開催については、高松良幸「売立目録所収美術作品のデータベース化とその近代日本における美術受容史研究への応用（課題番号 19520098 平成 19-21 年度科学研究費補助金〔基盤研究 C〕研究成果報告書）」に詳しい。

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~bunkazai/uritate100-houkoku.pdf>, (Accessed 2023-09-27) .

³ 当研究所閲覧室のウェブページを参照。

<https://www.tobunken.go.jp/joho/japanese/library/library.html>, (Accessed 2023-09-27)

⁴ 東京文化財研究所. 売立目録作品情報. 2022-03-30, <https://www.tobunken.go.jp/archives/文化財情報の検索/売立目録作品情報/>, (Accessed 2023-09-27) .

海外事例から見る文化資源のデジタルプラットフォームの現状と展望 ——データ公開が進むノルウェーの事例を中心に

Trends in Digital Platforms for Cultural Resources in Norway; Enhancing
Data Accessibility for the Public

宮前 知佐子*
MIYAMAE, Chisako

Resume:

ノルウェーの文化施設では、ヨーロッパナをはじめとする文化資源のデジタルプラットフォームや、その他のデジタルアーカイブなどオンラインを通じ、多くのデジタルデータを公開している。2023 年 2 月の調査をもとに、ノルウェーにおけるデジタルデータ公開に関する動向を報告する。

1. はじめに

2020 年度末、ノルウェーは、オランダ、ドイツに次いで、ヨーロッパナへ最も多くのデータを提供する国となった⁽¹⁾。ノルウェーでは、早い段階からインターネット、ブロードバンドの普及率が高水準にある。2000 年の統計によると、ノルウェーのインターネット普及率は、およそ 52%と世界トップであり、2022 年の統計でも、99%とトップレベルを維持している⁽²⁾。公文書館 (Arkive)、図書館 (Bibliotek) と博物館 (Museum) を連携し、情報技術を駆使して統合するという新しい文化基盤の構築も、早くから構想され、2003 年 1 月に、教会・文化省 (Kultur- og kirke departementet)のもと、構想の中核を担う「ABM 開発 (ABM - utvikling)」が設立された⁽³⁾。しかし、国を中心とした ICT インフラの整備や基盤構築が、文化資源のデジタルデータ公開を推進していると結論付けるのは早計である。ABM 開発は 2010 年に解散しており、連携構想をもとに構築されたデジタルプラットフォームを現在オンライン上で利用することはできない。本発表では、こうした背景にあるノルウェーの文化資源のデジタルデータ公開方法の動向を報告する。

2. 国立公文書館が提供する文化資源のデジタルプラットフォーム

ノルウェー国内における大規模な文化資源のデジタルプラットフォームのひとつは、国立公文書館が公開している DIGITALARKIVET⁽⁴⁾ (英語名称は The Digital Archives) である。「共通の検索システムとユーザインタフェースを通じて、一度

にできるだけ多くの資料へアクセス可能にする」という理念に基づき構築されている⁽⁵⁾。写真データのみを検索・閲覧できるインタフェース、祖先を探すことに特化したインタフェースなどが用意されており、ユーザの利用目的に合わせ入口が分けられていることも、このプラットフォームの特徴だろう。ヨーロッパナと連携しており⁽⁶⁾、ノルウェーからのデータの大半は国立公文書館によるものである。

3. 博物館のデジタルプラットフォーム

ノルウェー最大の博物館のデジタルプラットフォームは、DigitaltMuseum⁽⁷⁾である。ノルウェー版とスウェーデン版に分かれており、ノルウェー版では、146 の博物館が参加し、470 万アイテム以上のコレクションデータを横断的に検索できる。2016 年の段階で、ノルウェーからは 85 館、スウェーデンから 50 館が参加していた⁽⁸⁾。2016 年当時、ノルウェーの博物館の総数は 109 とも言われており⁽⁹⁾、相当数の館が参加していることになる。ただし、大学博物館は、調査・研究資料のリポジトリなどを利用しデータの公開を進めている⁽¹⁰⁾。DigitaltMuseum は、収蔵品管理システム Primus⁽¹¹⁾をベースに開発された。Primus は、リレハンメルにあるオープンエアミュージアム Maihaugen で、20 年ほど前に開発されたシステムがはじまりだという¹。現在は、KulturIT という企業が開発・運営を担っている。数年前に、ヨーロッパナ上にデータを公開するスキームが備わったという。ベータ版ではあるが、ヴァーチャルミュージアムなど、新たなコンテンツも用意され

*みやまえ ちさこ (国立民族学博物館)

つつある。

4. オスロ国立美術館のデジタルアーカイブ

国立国会図書館のリサーチ・ナビ⁽¹²⁾上で、「二次利用がしやすいデジタルアーカイブ」として紹介されているデジタルアーカイブのひとつに、オスロ国立美術館(Nasjonalmuseet)が公開するデジタルコレクション⁽¹³⁾がある。オスロ国立美術館は、2022年6月にオープンし、ヨーロッパ最大級の美術館となった。ナショナルギャラリーに、建築博物館、装飾芸術・デザイン美術館、コンテンポラリーアート美術館の計4つの既存施設を統合した美術館である。収蔵品管理には、国内の他の博物館と同様、Primusが利用されていた。KulturITや美術館のコミュニティと共に、美術史用語の標準化にも取り組んでいたが⁽¹⁴⁾、機能上の観点から、2017年にMuseumPlus⁽¹⁵⁾への移行を決め、2019年、システムを一新したという²。CDWAやSPECTRUMに準拠したドキュメンテーションを実施し、画像データはIIIFに対応するなど、システムを移行したとはいえ、国内外のデジタルアーカイブ、プラットフォームなどとのデータの相互利用を意識していると見られる。

5. まとめと展望

本発表では、文化資源のデジタルデータ公開方法の動向として、ノルウェーにおける事例を紹介した。ノルウェーでは、公文書館、図書館、博物館を統合するデジタルプラットフォームの構想は2010年に消滅したものの、それぞれの機関が、膨大な量のデジタルデータを、コレクションの特性に合わせ公開することで、ユーザ側から評価を受けていると言える。デジタル技術の進化やドキュメンテーション手法の標準化などに伴い、ポータルサイトやプラットフォームを通さずとも、データの検索は可能になった。そこで、文化資源のデジタルデータ公開においては、大規模なプラットフォーム上でのデータ量を問われるフェーズから、利用のしやすさなど、ユーザのデータ活用に向けた機能の実装がより求められる段階に移ってきているように見える。ヨーロッパアナでも、データの質の向上やデータの見せ方の改善が課題であるという³。本発表が、デジタルデータ利活用に向けた議論のきっかけになれば幸いである。

^{1,2,3} 本発表は、Maihaugen、オスロ国立美術館、ヨーロッパアナなどでのインタビュー調査に基づく。

(1) Wikipedia, Europeana, <https://no.wikipedia.org/wiki/Europeana>, (Accessed 2023-09-20)

(2) ITU, ICT Statistics, <https://www.itu.int/itu-d/sites/statistics/>, (Accessed 2023-09-20)

(3) マグヌスセン矢部直美, 和気尚美, 吉田右子『文化を育むノルウェーの図書館: 物語・ことば・知識が踊る空間』新評論, 2013年.

(4) DIGITALARKIVET, <https://www.digitalarkivet.no>, (Accessed 2023-09-20)

(5) Caterina Sbrana, More than 53000 photographs by the National Archives of Norway online; the Digital Archive is an extraordinary example of common search system and user interface, DIGITAL MEETS CULTURE, 2020年3月11日, <https://www.digitalmeetsculture.net/article/national-archives-of-norway-online-through-the-digital-archive/>, (Accessed 2023-09-20)

(6) 田渕宗孝「ノルウェーにおけるアーカイブズとその政策概要—公文書法からデジタル戦略まで—」, 『名古屋大学大学文書資料室紀要』第24号(2016年3月), pp.63-98.

(7) DigitaltMuseum, <https://digitaltmuseum.no>, (Accessed 2023-09-20)

(8) Ole Marius Hylland, Even Better than the Real Thing? Digital Copies and Digital Museums in a Digital Cultural Policy, Culture Unbound Journal of Current Cultural Research, Volume 9, Issue 1(2017), pp.62-84.

(9) Brita Brenna, Museums and museologies in Norway, Nordic Museology, No.1(2018), pp.111-118.

(10) Matsumoto Mieko, Uleberg Espen, Curation of Digital Archaeological Data in Norway, Internet Archaeology, 58(2021). <https://doi.org/10.11141/ia.58.29>, (Accessed 2023-09-20)

(11) Collection Trust, Primus, <https://collectionstrust.org.uk/software/primus/>, (Accessed 2023-09-20)

(12) 国立国会図書館リサーチナビ, 二次利用がしやすいデジタルアーカイブ(美術館), https://rnavi.ndl.go.jp/jp/guides/post_1142.html, (Accessed 2023-09-20)

(13) Nasjonalmuseet, Collection, <https://www.nasjonalmuseet.no/en/collection/>, (Accessed 2023-09-20)

(14) Yvonne Brenden Hansen, Dag Hensten, Gro Benedikte Pedersen and Magnus Bognerud, Norwegian Artist Names Authority List of Artists in Norwegian Art Collections, Heritage, 2(1)(2019), pp.490-506. <https://doi.org/10.3390/heritage2010033>, (Accessed 2023-09-20)

(15) MuseumPlus, <https://www.zetcom.com/en/museumplus-en/>, (Accessed 2023-09-20)

戦没学生の楽譜の保存・継承における課題 ——鬼頭恭一を中心に

Challenges in preserving and inheritance on musical scores of students
killed in the Second World War: Focusing on Kyoichi KITO

橋本 久美子*
HASHIMOTO, Kumiko

Resume:

戦没学生が遺した作品の多くは未定稿かつ習作に近いものであるが、戦時下の音楽学生の作曲と音楽に込めた想いを知る数少ない手がかりとなる。戦没学生の楽譜の特徴を念頭に置いた資料のデジタル化、楽譜データの保存・継承の課題と展望について、東京音楽学校本科作曲部一年で「学徒出陣」した鬼頭恭一の事例を中心に考察する。

1. はじめに

長野県上田市に戦没画学生の作品の展示施設「戦没画学生慰霊美術館 無言館」が開館したのは平成9(1997)年のことである。翻って戦没音楽学生の作品や遺品を収蔵・展示する施設は作られていないが、近年音楽側でも戦没者資料の調査収集が行われ、美術側との相違も見えてきた。美術実技が作品制作なのに対し、音楽実技の演奏は作品を残さず、作曲専攻生は1学年に数名に過ぎない。東京美術学校は男子校であるが、東京音楽学校男子は女子の半分強である。また楽譜を絵画のように展示しても音楽が伝わらない等の課題もある。しかし戦没音楽学生とその作品を伝えることは喫緊の課題であり、楽譜等の資料や記録をアーカイブズとして伝えるための課題を検討する。

2. 戦時下の東京音楽学校の学生概況

2.1 音楽学校における学徒出陣と戦没学生

学科	入学年度 昭和	学生数 (名)	男子 (名)	女子 (名)	男女比 (%)
予科・本科	13-20	474	172	302	13:64
甲種師範科	14-20	412	146	266	35:65
邦楽科	14-20	165	36	129	22:78
全科		1,051	354	697	34:66

表1 学科別男女学生数（入学者資料による）

「表1」は昭和16年12月から昭和20年8月に東京音楽学校に在籍した学科別男女学生数である。4年制の予科本科と、3年制の甲種師範科及び邦楽科とでは入学年度



図1 全科男女比

が異なる。男女比は「図1」のように示される。

東京美術学校との比較では、美術は男子学生数が音楽の3.5倍、5年制のうえ浪人も多く、入隊者数は音楽の7.4倍、徴集率も2倍である。入隊後の死亡率は音楽より低い、全国の大学が独自に算出した5から9%を両校とも大きく上回る。

学校名	学生数	入隊者	徴集率	戦没者	入隊後 死亡率
東京音楽学校	354名	76名	21%	14名	18%
東京美術学校	1,266名	560名	44%	81名	14%

表2 東京音楽学校と東京美術学校の男子学生数、入隊者数等の比較 [2023年8月現在] (入退学記録、同窓会資料による)

2.2 東京音楽学校の戦没学生

戦没学生14名のうち、作品が確認された5名を入学順に下表とした。戸田盛忠、草川宏、葛原守は研究科在学中に召集され、鬼頭恭一と村野弘二は本科作曲部1年生で「学徒出陣」となった。戸田と葛原の専攻はピアノであった。

氏名	空襲	作品数と分野	作曲時期	楽譜の保管者/形態
戸田	有	1(歌曲)	不明	不明(出版譜のみ)
草川	無	約30(歌曲、合唱曲、独奏、室内楽、管弦楽[草稿])	入学前-入隊後	親→弟/手稿譜
葛原	無	5(歌曲、独奏曲、室内楽)	入学前-在学中	親→妹→甥。手稿譜
鬼頭	有	5(歌曲、独奏曲、室内楽)	在学中-入隊後	親戚、学友、許嫁→親、弟→靖國、妹/手稿譜
村野	有	9(歌曲、歌劇アリア、独奏曲、室内楽)	入学前-在学中	親→弟→姪/手稿譜

表3 戦没学生の楽譜の概要。空襲被害の有無、作品数、作曲時期、保管者等

*はしもと くみこ

3. 鬼頭恭一の楽譜のアーカイブ化

3.1 鬼頭恭一のプロフィール

鬼頭は大正 11(1922)年 6 月 10 日愛知県の酒問屋の長男として生まれた。昭和 15(1940)年 9 月東京音楽学校選科で学び、同 17 年 4 月同校予科に入学。翌年 4 月本科作曲部に進むが、10 月在学徴収臨時特例により 11 月仮卒業となり、12 月大竹海兵団に入団。三重、築城、神町を経て、霞ヶ浦海軍航空隊にて昭和 20(1945)年 7 月 29 日、ロケット戦闘機「秋水」搭乗の訓練中に殉職した。

3.2 楽譜原本の保管者

鬼頭の実家は名古屋空襲に遭い、楽譜も焼失した。東京の親戚宅にあった《鎮魂歌》と築城海軍航空隊時代の作品が残され、築城で再会した音楽学校の学友が《雨》の楽譜を、他は婚約者の手元にあった。《鎮魂歌》¹と《雨》は戦後に鬼頭家に渡され、2015 年になって元婚約者の家族から楽譜が研究者²に渡され、翌年には海軍帽章や手紙などが遺族に渡され、ともに母校に託された。

3.3 作品について

- 1) 《鎮魂歌—正宏君の英魂に捧ぐ》: 楽器指定のない四声部（一部は五声部）。へ長調。17 小節。昭和 17 年 2 月にビルマで戦死した従兄佐藤正宏に。鬼頭は東京の親戚・佐藤家から通学していた。
 - 2) 《雨》: 歌曲。清水史子詩。昭和 19 年 11 月 3 日完成。3 部構成。第 1 部と第 3 部の穏やかな初夏の情景と、第 2 部の「ますらをのかたみ」を受け取る女性の悲痛な叫びが著しい対照をなす。
 - 3) 無題(Allegretto)ハ長調、旋律楽器とピアノ。66 小節。昭和 19 年 7 月 6 日作曲。
 - 4) 無題(Allegretto)イ短調、ピアノ、186 小節。
 - 5) 無題(女子挺身隊の唄³)作詞者不明、ハ長調、歌とピアノ、20 小節。
 - 3) 無題([惜別の譜]⁴)。鬼頭から讃井への作曲課題。20 小節。昭和 20 年 5 月 17 日編曲。讃井所蔵。
- 《雨》は鬼頭の特攻の決意、《惜別の譜》の「命

の定め」は彼自身の心情との符合を推測させる。

4. 戦没学生の楽譜と音楽をいかに伝えるか

4.1 楽譜と演奏

楽譜は、目に見えない音楽構想を一定の約束事に従い視覚化した紙資料である。手稿譜は原本であるが、その原点は作曲者の構想にあり、楽譜を展示するだけでは音楽を伝えることができない。

そこで演奏が必要になるが、演奏者ごと演奏のたびに新たな再現となることは再現芸術の特性である。戦没学生の楽譜ではさらに課題がある。作品の多くは推敲不十分な未定稿で、誤記が疑われる場合もある。演奏に際し、遺族は楽譜を遺品として、書かれた音符の通り音にすることを希望する場合もあるが、演奏家が音に違和感を感じながら感情移入して演奏することは難しい。楽譜の精査は重要である。また楽譜があればその画像と演奏音源の公開は可能になるが、後になって関連情報の修正が必要になることも珍しくない。

4.2 デジタルアーカイブの継続的構築の課題

戦前の楽譜と現代の音源を合わせた保存・継承を可能にしたのがデジタルアーカイブである。2019 年、楽譜資料や音源を公開する「戦時音楽学生 Web アーカイブズ<声聴館>」⁵を開設した。

今後は以下のような現状や課題を検討する必要がある。①演奏会の収録・編集とコンテンツを別々の部署が担当し、公開までに数年かかることがある。②公開件数や内容に適したデザインの対応。③アーカイブズは使われることで劣化防止につながるため、演奏会やシンポジウムを継続する。④クラウドファンディングで開始した経緯に鑑み、公開性・透明性を保つ。⑤関連機関と連携を図る。⑥海外を視野に入れたサイト構築。⑦<声聴館>にヒントを得た多様な企画が世間で生まれているため、<声聴館>ではより正確な情報発信と原資料重視の実践が重要になること等である。

¹ 《鎮魂歌》の楽譜データおよび遺族提供による来歴等を以下に記載した(2019/3/23 公開)

<https://archive.geidai.ac.jp/13335> (Accessed 2023-09-24)

² 愛知県在住の研究者・岡崎隆は 1998 年頃に鬼頭恭一存在を知り調査開始、ホームページ「日本の作曲家」で鬼頭を紹介している。<http://www.medias.ne.jp/~pas/kitou2.html#anchor148069> (Accessed 2023-09-24)

³ 仮題は歌詞に由来。「神洲無窮の天地と栄える国の女子学徒大詔畏みて祖国の難に敢然といざ立て我等挺身隊」

⁴ 譜面にタイトルの記載なし。讃井智恵子は「惜別の譜」と呼んでいたと讃井優子(嫁)が証言。作詞者不明。

⁵ <https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/> (Accessed 2023-09-24)

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性和芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol.38, No.2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行

しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブSIG)があり、自由に参加できます。

(地区部会・SIG連絡先:

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>)

- ・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
 - ・情報・資料の収集・交換・提供
 - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
 - ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
 - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』並びにHPで提供)
 - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(HPで提供)
 - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
 - ・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
 - ・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携
 - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000 円 (ただし、65 歳以上は 4,000 円 [自己申告制])
- ・学生会員 4,000 円 (大学学部、大学院などに在学中の学生。申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員 (個人または機関・団体) 一口以上 (一口 30,000 円)
- ・団体購読会員 12,000 円

■ホームページ

- ・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。
<http://www.jads.org/>



■入会方法

- ・HP から「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。
(入会申込書ダウンロード：

<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>



Art Libraries Journal (2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル (株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2023 年 6 月 1 日現在

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第16回秋季研究集会予稿集

発行日: 2023 年 10 月 28 日 (土)

編集: アート・ドキュメンテーション学会

発行: アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org/>